



2025_大曲の花火―秋の章―



カザ病院をイスラエル軍が二重攻撃_20人死亡

8月ラストの土日ですが、東京都心は40℃に迫る猛暑で再び、歴史を塗り替えているようです。連続猛暑日も18日から10日間、これも記録更新とのことで、ただただアッチチ、アチの世界です。100数十年ぶりとか聞いているとNLBで大谷選手が記録を塗り替えているのと同じような感覚になります。まあ、どちらもスゴイ、まともではないということでは共通しているところがあるのかな？

この暑さで海水浴場や屋外プールは閑古鳥が鳴いているそうです。そりゃそうです、裸足で砂浜を歩くなんて自殺行為みたいなものだし、ビーチパラソルなんて日よけの役にも立たないだろうし、灼熱のプールサイドに腰を下ろすとヤケド、引率する親だってそりゃ尻込みするだろうと思います。そのうち“海の家”なんて文化もなくなってしまいかもね。

昨夜は故郷秋田の“大曲の花火―秋の章―”、東京に出てきてからはもうライブで観る機会もなくなってしまいましたが、息子の家族が友人たちと車で出かけていました。我々は夫婦はNHKBSで3時間観ていましたが、現場での迫力、ライブ感はないものの、十分楽しむことができました。学生時代からほぼ毎年のように、大曲の友人宅に泊まり込んでみていましたが、人口8万人にも満たない街に76万人の観客が集う年もあって、栈敷席のある河川敷にたどり着くまで、ヒトひと人の行列で恐怖さえ覚えるほどで、50代からは足が遠のくことが多くなりました。今となってはそれも懐かしい思い出です。

パレスチナガザ地区では、イスラエル軍の無人機攻撃によるハンユニスにあるナセル病院への二重攻撃で、新たに医療従事者やジャーナリストを含む患者ら20人ももちろん女性や子どもたちも含む一が殺され、ています。停戦に向けての協議は何のその、ネタニヤフ首相は人を人とも思わぬようなジェノサイドを繰り返しています。その状況について東京新聞“本音のコラム”師岡カリーマさんらしい視点で論評をしていました。

偽善の枢軸 8月30日付

師岡 カリーマ — 文筆家 —

今月 10 日に続き、またしても複数のジャーナリストがガザで爆弾に散った。今度は南部ナセル病院をイスラエル軍が攻撃、救助隊や記者が現場に駆けつけたところを 2 度目の攻撃が襲い、約 20 人の死者の中には 5 人の報道関係者がいた。

イスラエルの説明は、「悲劇的な事故だ民間人や医療・報道関係者の仕事は尊重している」とか「病院にハマスが設置した監視カメラを爆破した」「記者と言ってもハマス要員だ」など一貫性も説得力もない。当然だ。尊重するなら、万単位の民間人と 240 人超の記者を殺せるわけがない。医師の拘束と虐待が「事故」なわけがない。ハマスは病院を盾にしているとの主張も、そこで活動した外国人医師が否定している。

攻撃を仕掛け、人が集まった頃に再び襲うのはテロ組織やイラクやアフガニスタンで多用した手口だ。つまりテロリストの手法だ。西側諸国はイスラエル批判を強めているように見えるが、英国などは諜報面などの軍事支援を続けているといわれる。皮肉にもその英国政府は、イスラエルによる大量虐殺に抗議する市民団体「パレスチナアクション」をテロ指定、団体に支持を表明するだけで逮捕される市民や高齢の聖職者が大勢いる。

かつてイランとイラクと北朝鮮が「テロ支援国」として「悪の枢軸」と呼ばれた。今、悪の枢軸は誰か。

“偽善の枢軸”という表現は、ネタニヤフではないようにもとれます。彼は“悪の枢軸”そのもので、彼の後ろ盾になっているトランプや英国政府などの EU 諸国がパレスチナ支援とみせかけて、実はイスラエルをバックアップしている国がある、それが偽善ではないかと僕は思います。この事件について、東京新聞 1 面“筆洗”でも別の視点から取り上げていました。

筆洗 8月28日付

医者と記者の共通点は何か。誰かに聞いた「名回答」がある。どっちも「みんなが逃げる方向に走る」▼少し説明がいるか。大事故が起ったとする。普通の人々は危険な現場からから逃げようとするが、医者は事故に巻き込まれた人の命を救うため、その現場へ走る。記者も同じで、何があつたかを伝えるために現場へ。だから両方ともみんなとは逆の方向へ走ることになる▼逆方向へ走る「習性」が狙われた気がしてならない。パレスチナ自治区ガザのハンユニスにある病院がイスラエル軍の攻撃を受け、記者や医療従事者を含む、少なくとも 20 人が死亡した▼イスラエル軍は病院攻撃に「ダブルタップ」のような戦術を使っている。2 度目の攻撃は最初の攻撃から約 10 分後だった▼この「ダブルタップ」で何が起きるかは容易に想像できるだろう。最初の攻撃の後、人々を手当てしようと医療従事者や救助隊がやってくる。何が起きたかを確かめようと記者もやってくる。そこに 2 度目の攻撃があれば…。非人道的な攻撃方法である▼亡くなったアルジャジーラの男性記者は停戦後に結婚する予定だったと聞く。イスラエル側は「記者を標的にしていない」と説明す

るが、今月上旬にも 6 人の記者が死亡する攻撃があったばかりで「逆の方向に走る」人の悲劇が続く。よほど報道されたくない現実がガザにあるらしい。

“ダブルタップ”というのは、被害拡大を狙って攻撃を仕掛け、人が集まった頃に再び襲う攻撃手法で、前述のとおりテロリストが多用した手口で、最近ではシリア内戦での政府軍による空爆やロシアによるウクライナ侵攻などでも使われています。つまりイスラエル国家は正真正銘の“テロリスト集団”だということです。ちなみに今回の 2 度目の攻撃は 10 分後でした。今朝のニュースでは、カザを完全制圧するために、イスラエルと米国主導の物資支援も停止するとのこと。 “皆殺し”という表現がぴったりです。この侵略行為を誰がどんな形で収めることができるのか。少なくとも自称“ノーベル平和賞候補”のトランプさんではないと断言できます。2023 年の戦闘開始以後のガザ側の死者は 6 万 2749 人、餓死や栄養失調による死者は 300 人になったとの報道がありました。

憲法の改憲の議論について、東大名誉教授上野千鶴子さんが東京新聞の記者によるインタビューで、とても説得力のあるお話をしていました。

私の 80 年談話 8 月 28 日付
「選憲」で矛盾と向き合う

上野千鶴子 — 東大名誉教授 —

戦後日本の出発点になっている今の憲法には、「ねじれ」と「よごれ」があるという指摘があります。文芸評論家の江藤淳さんの問題意識を受け継いだ加藤典洋さんが示した概念で、このねじれとよごれを抱えたまま 80 年を過ぎてきてしまいました。

ねじれは、戦後の非武装平和主義と民主主義が敗戦と占領軍によってもたらされたこと、よごれとは日米安保条約によって米国の軍事基地が国内に数多く存在し「占領状態」が続いていることです。日本の親米保守は対米自立を言えないのがアキレス腱。護憲派も、自衛隊がアジア圏で中国に次ぐ軍事力を持つ矛盾に向き合わず、現状を維持しつつ 9 条を守ろうと主張しています。

戦後、こうした議論にふたをしていましたが、今の世界情勢はある意味でねじれとよごれの解消の好機です。冷戦終結後の米国の一極支配が終わりつつある今、米軍に出ていってくれと言える好機なのに誰もそれを言わない。

仮に米国依存から脱却できても地域平和をどう保つかと言う課題があります。欧州連合 (EU) のようなアジア共同体を創設すべきだとの提案もありますが、それは難しい。日本が戦後処理を誤ったからです。歴史認識や慰安婦、徴用工などの対応を謝り、中国とも韓国とも関係がこじれにこじれている。子のツケをどう払うのかが、戦後 80 年談話の宿題です。

その上で矛盾を抱える憲法と向き合っていく必要があります。私は江藤、加藤両氏らの理念を基に憲法を国民が選び直す「選憲」を挙げています。戦後世代が現行憲法の平和主義と国民主権を選び直すことで正当性を獲得することが必要です。

護憲派は国民投票そのものに反対しており、「今の状況で国民投票をすれば、平和主義や民主主義、基本的人権は守れない」という声があることも知っています。交流サイト(SNS)上のプロパガンダが影響力を持つ中、仮に国民投票した場合、結果は予測しにくい。プロパガンダに乗せられないよう、しっかり主権者教育をする必要があると思います。ただ、私はそれほど悲観していません。

少し前の世論調査で国家存亡の危機に直面したとき、国のために戦うかを尋ねたものがありました。日本の若者の非常に多くが「逃げる」と答えました。戦後 80 年かけて「平和ボケ」と言われる日本がこういう若者たちを育てました。本当にすばらしいと思います。(聞き手・佐藤航)

国家存亡の危機に“逃げる”と答える若者たちを育てた“平和ボケ”日本の教育をすばらしいと評価している上野さん、個人的には僕もまったく同感です。だから、防衛費を膨らませて軍備をしても、誰もまともに戦うような国民はいないのです。どんどん目減りしている自衛隊員と戦争好きな自民党右派の政治屋たちで敵と向かい合えばいいのです。とはいってもその人たちも逃げそうですけどね。その昔—約 55 年前—、加川良というシンガーソングライターが“教訓 I”という同じようなことを唄っていました。

教訓 I 詞・曲 加川 良 抜粋

命はひとつ人生は 1 回 / だから 命を捨てないようにネ / あわてると つい フラフラと / 御国のためなのと言われる
とね / 青くなってしりごみなさい / にげなさい かくれなさい
御国は俺達 死んだとて / ずっと後まで 残りますヨネ / 失礼しましたで 終わるだけ / 命のスペアは ありません /
青くなってしりごみなさい / にげなさい かくれなさい
命をすてて 男になれと / 言われた時には ふるえましようヨネ / そうよ私しゃ 女で結構 / 女のくさったので 構いませ
んよ / 青くなってしりごみなさい / にげなさい かくれなさい
死んで神様と言われるよりも / 生きてバカだといわれましようヨネ / きれいごと ならべられた時も / この命を 捨てな
いようにネ / 青くなってしりごみなさい / にげなさい かくれなさい

上野さんが我々に伝えたいことが、この歌には凝縮されているようです。学生時代にギター片手に人前で歌っていた頃が実に懐かしい—別に感傷に浸っているわけではない—。

明日から 9 月。ですがこの猛暑はまだまだ続き、さらに過去の記録を塗り替えてゆくとの予報です。昨年も 10 月中旬まで半そで、 “スーパークールビス” なんぞと云っていましたが、今年はひょっとしたら 11 月でも半そでだったり、小さい秋、見つけた！